

洋戦争期について考察する。一九四〇年の

「満洲移民政策基本要綱」公布により満洲国（関東軍）に全ての権限が委譲されると、「満鮮拓殖」会社は「満洲拓殖」会社に統合される。朝鮮人農業移民も日本人と同様に「開拓民」と改称されて政治的・軍事的役割を課せられるようになり、食糧増産と国防を目的として従来は入植が禁じられていた「満」ソ国境の満洲北部の零細未開墾地に動員された。一方、朝鮮内では毎年の割当戸数を充当するために地方行政の面職員が「過大宣伝」による募集を行い、中南部を中心に朝鮮から農民が北滿に渡ったが定員割れが続いたこと、また「朝鮮青年義勇軍」や農村振興運動を背景に「分村移民」が企画されたものの成功せず、朝鮮人農業移民の統制政策は衰退に向かったことが明らかにされた。

以上、「満洲国」期の朝鮮人農業移民の全体像が明らかにされたことから、国策である「満洲移民」は朝鮮人では振るわず、「満洲国」期の在満朝鮮人の増加は自由移民によること、その原因として朝鮮総督府の朝鮮人移民積極策にかかわらず、関東軍の抗日勢力への治安対策に関連した朝鮮人

抑制方針があったことが明らかになった。

また満洲での朝鮮人村落の生活実態について事例が紹介されている点は貴重な成果であり、すでに研究が進んでいる都市移民・商業移民と併せて在満朝鮮人の社会文化やアイデンティティを解明するうえで本書の緻密な過程解明はその土台となるものと高く評価される。近代東アジア史をめぐる意味を深めていくうえでは、こうした在満朝鮮人研究の視点は、他の移民研究とともにナショナル・ヒストリーを超えた近代社会のあり方を捉える試みとして期待されよう。

（A5版 三五二頁 二〇二二年二月

昭和堂 税別五五〇〇円）

（長沢一恵 天理大学非常勤講師）

会 告

二〇一三年度史学研究会大会および総会は、予定どおり一月二日（土）午後一時より京都大学文学部第一・二講義室にて開催されました。

公開講演は、水野直樹、小林致広の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

植民地の時代を生きた朝鮮人エリート

——三高卒業生朴錫胤の生涯——

水野 直樹氏

メキシコ・エスノヒストリー研究と
フンボルトの将来した絵文字資料

小林 致広氏

なお、大会と総会に先立って開催された定例の理事会・評議員会において、二〇一三年度会務報告がなされました。

二〇一三年度

史学研究大会講演要旨

植民地の時代を生きた朝鮮人エリート

——三高卒業生朴錫胤の生涯——

水野直樹

朴錫胤（一八九六—一九四八？）は、植民地期朝鮮において最高のエリート知識人であったが、現在の韓国では「親日派」としてしか知られていない。しかし、その生涯をたどると植民地時代のさまざまな局面で興味深い役割を果たした人物であることがわかる。

一九一〇年代初めに日本に留学した朴は、第三高等学校、東京帝国大学（法学部）で学んだ。三高野球部で活躍したり、文芸同人誌に参加したりと、多方面にわたる活動をした。帰国後、朝鮮総督府の在外研究員に選ばれ、英国ケンブリッジ大学でも研究生活を送った。京城帝国大学（二六年法文学部など開学）の教授候補者として名前があげられていたが、結局、教授にはなれなかった。日本留学中に留学生運動のリー

ダー的存在（ただし独立をめざす「漸進派」）であったため、警察当局が監視の対象としてだけでなく、京城帝大内に朝鮮人を教授することを忌避する空気があったことがその理由と考えられる。

三〇年、朴は総督府の朝鮮語御用新聞である毎日申報の副社長となる。日本語新聞の京城日報社が発行する朝鮮語新聞であったため、副社長が同紙の最高責任者であった。在任中には、自ら多くの記事・論説を書いた。

満洲事変後、朴は間島（現在の延辺朝鮮族自治州）在住の親日的朝鮮人を組織して民生団を結成した。朝鮮人の生活安定などを綱領に掲げた団体であったが、「間島における朝鮮人自治」をめざすものとみなされ（朴らもその意図を隠していなかった）、日本当局に認められずに終わった。しかし、民生団は抗日運動側に朝鮮人幹部らの粛清という混乱をもたらすものとなったため、朴はこの後、「民族反逆者」と考えられるようになった。

日本の満洲侵略が議題となった国際連盟総会の日本代表団随員としてジュネーブに行った朴は、代表団に加わっていた石原

莞爾と親しくなり、彼の「東亜聯盟論」に共鳴することになる。「東洋民族の連合、朝鮮の自治」が朴の主張として固まったのは、民生団の結成、石原との交遊を通じてだったとみられる。

三四年からは満洲国の官僚となり、外務局調査処長などを務めた後、三九年ワルシャワ駐在満洲帝国総領事に任命された。ワルシャワに赴任して二ヵ月後、ドイツとソ連の侵攻によってポーランドが解体されたため、総領事としての勤務は短いものとなった。

満洲に戻り官僚として勤めながら、協和会の朝鮮人幹部としても活動したが、四一年頃に南京に移った。朝鮮総督府や日本政府が東亜聯盟論を排撃することを決めたため、満洲に居づらくなったからであろう。南京や上海で朴が何をしていたかは不明だが、重慶の中華民國臨時政府と連絡をとっていた節もある。

四五年五月頃、満洲国官僚を辞めてソウルに戻った朴は、八月の日本敗戦前後に重要な役割を果たすことになる。総督府と朝鮮人有力者との橋渡し役である。呂運亨らによる建国準備委員会に関与して、総督

府・朝鮮軍との交渉にも当たった。しかし、「親日」活動の経歴や日本側から資金提供を受けていたことから、朴を非難する声が出るようになった。四五年末、ソウルを離れ、北朝鮮の陽徳温泉で静養中に摘発され、「民族反逆者」として裁判にかけられ、四八年死刑を宣告された（処刑時期は不明）。

このように、朴錫胤は植民地期の朝鮮で最高の教育を受けたエリートであり、スポーツマン、ジャーナリストの一面を合わせ持つ行動的な知識人であった。京城帝大の教授候補者になりながら、それを許さなかったのは日本の植民地支配にほかならなかった。毎日申報副社長、満洲国外交官僚という朝鮮人としてはもともと高い地位に就いたが、それは民生団組織者という経歴と合わせて、朴を「民族反逆者」と規定する根拠となった。悲劇的な生涯といわねばならないが、彼の生涯を通して植民地の時代がどのようなものであったかを垣間見ることが出来る。

なお、詳細は、拙稿「朴錫胤——植民地期最高の朝鮮人エリート——」（『講座 東アジアの知識人』第四巻、有志舎、二〇一四年二月刊行予定）を参照されたい。

メキシコ・エスノヒストリー研究と フンボルトの将来した絵文書資料

小林 致 広

一年間のメキシコ滞在中、アレクサンダー・フォン・フンボルトは、南米のオリノコ川流域やアンデス山脈における自然地理学の調査とは異なる分野で、研究調査をすることができた。彼の本来の専門分野である火山の生成メカニズムを探索のための現地調査、鉱山学に関する専門知識の教授だけでなく、副王庁文書館やメキシコ大学文書館などで政治・経済地理学的なメキシコ地誌に必要な統計資料の収集に時間を割くことができた。その過程で、文書館に死蔵されていたイタリア人ボトゥリニが収集していた五〇〇点余の絵文書・古文書類の「残骸」に遭遇することになる。フンボルトは購入あるいは譲られた絵文書断片一六点をヨーロッパに持ち帰ることになる。

一八一〇年に出版された『山岳景観とアメリカ先住民モニュメント』には、山岳や風景、ピラミッドなどの考古学遺跡、出土した石像モニュメントの挿絵などとともに、

メキシコの絵文書の挿絵が所収されている。フンボルト絵文書断片一六点の中から選ばれた挿絵四点と、帰国後に、バチカン、ウィーン、パリなどの文書館で閲覧・複製したメキシコの絵文書の挿絵一二点が所収されている。しかし、メキシコの絵文書に関する説明や記述は「急ぎ足」のものでしかなかった。フンボルトは、古代メキシコの暦法や数の体系、象形・絵文字という表記体系を旧大陸の諸文明と比較することに関心があったため、絵文書資料が潜在的に保有するエスノヒストリー研究面での価値に無頓着であったといえよう。

フンボルト絵文書断片の本格的研究は、一八九二年の「コロンブス四〇〇周年記念」として復刻・出版された際に、「ドイツ文献学者エドワード・ゼーラーが行った詳細な考証と分析まで待たねばならなかった。その後の一世紀で、フンボルト絵文書断片が本来属していた絵文書、あるいは関連すると思われる絵文書資料が発見されている。こうした状況を踏まえ、本発表においては、（一）先スペイン期の先住民民族の移動・系譜と地図表現、（二）アステカの貢納体制研究、（三）植民地初期のメキシコ中央高

原の先住民社会の変容という三つのテーマをとりあげ、メキシコのエスノヒストリー研究においてフンボルト絵文書断片はどのように分析し、利用していくことができるかについて紹介することにした。

最初のテーマに関しては、メキシコ中央高原の後古典期の覇者アステカの起源・遍歴に関する二つのタイプの起源神話（洞窟出発説と湖の島出発説）と関連させて、ウアマントラ絵文書の一部であることが判明しているフンボルト絵図断片三・四が、先住民オトミ系民族集団の最終定着地ウアマントラへの移動の直前の段階を扱っていることを紹介した。二番目のテーマに関連しては、フンボルト絵文書断片一は、一九四〇年にゲレロ州で発見のアソユ絵文書二裏面のトラパ地方の貢納記録と同じ資料であることが判明している。この貢納記録は、先スペイン期の一四八七年―一五二二年までの年四回の貢納を余すことなく記録している。アステカに収めた貢納の量や品目の変化から、トラパ地方の領主に対するアステカ支配の強化の過程を追跡できる。三番目のテーマに関しては、先住民社会が植民地支配者側の統治システムに柔軟に抵抗し

ている様子を探ることができる資料をとりあげる。フンボルト絵図断片六は、一五三〇年代末に異端審問で処刑されたテスココの有力先住民貴族ドン・カルロスの子孫をめぐる訴訟に関連して作成されたオストテイクバック土地図と酷似する構図をしている。しかも、前者には後者に描かれていない訴訟当事者が絵文字入りで描かれている。また、フンボルト絵図断片七・一三は、一五七〇年前後にミスキアウアラ住民が村を管轄するスペイン人に支払った貢納・サービスの領収書であり、同じ資料群とみなせる絵文書も四点確認されている。これら以外にも、フンボルト絵文書断片の中には、場所・時代・作成者などは不明であるが、特定の先住民個人や共同体が、自らの土地の権利や特権を主張するために作成したことが明らかなものもあり、先住民社会の多様な対応の一端を知ることができる。

二〇一三年度

史学研究会大会・総会の記録

史学研究会の二〇一三年度大会・総会は、一月二日（土）一三時から一七時半まで、京都大学文学部第一・二講義室において開

催された。

総会では、上原真人理事長による挨拶の後、岩鼻通明氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告・審議がなされた。

庶務（井谷綱造常務理事）からは、役員の交代、その他について報告があり、来年度の例会は四月十九日（土曜日）に「折り」をテーマとして開催することが案内された。

編集（吉川真司常務理事）からは、『史林』の刊行について報告があった。

会計（米家泰作常務理事）からは、二〇一二年度予算の紹介、その他の報告があった。

広報（永原陽子常務理事）からは、広報関係について報告があった。

これに引き続き、公開講演が行われた。講演は次の二本であった。

水野 直樹氏

「植民地の時代を生きた朝鮮人エリート

——三高卒業生朴錫胤の生涯——」

小林 致広氏

「メキシコ・エスノヒストリー研究とフンボルトの将来した絵文書資料」